

源氏物語

胡蝶

紫式部

青空文庫

盛りなる御代みよきさきの後に金の蝶てふしろがねの

鳥花たてまつる

(晶子)

三月の二十日はつか過ぎ、六条院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多くさえずる小鳥が来て、春はここにばかり好意を見せていると思われるほどの自然の美に満たされていた。築つきや山まの木立ち、池の中島のほとり、広く青み渡った苔こけの色などを、ただ遠く見ているだけでは飽き足らぬものがあるうと思われる若い女房たちのために、源氏は、前から造らせてあつた唐風の船へ急に装飾などをさせて池へ浮かべることにした。船下ろしおの最初

の日は御所の雅楽寮の伶人れいじんを呼んで、船楽を奏させた。親王がた高官たちの多くが参会された。このごろ中宮は御所から帰つておいでになった。去年の秋「心から春待つ園」の挑戦ちようせん的な歌をお送りになつたお返しをするのに適した時期であると紫の女によお王うも思うし、源氏もそう考えたが、尊貴なお身の上では、ちよつとこちらへ招待申し上げて花見をおさせするといふようなことが不可能であるから、何にも興味を持つ年齢の若い宮の女房を船に乗せて、西東続いた南庭の池の間に中島の岬みさきの小山が隔てになつているのを漕こぎ回らせて来るのであつた。東の釣つり殿へはこちらの若い女房が集められてあつた。竜頭りゆうとう鷓首とうげきしゆの船はすっかり唐風に装われてあつて、梶かじ取り、棹さお取りの童わらわぎむらい侍は髪を耳の

上でみずらに結わせて、これも支那風の小童に仕立ててあつた。

大きい池の中心へ船が出て行つた時に、女房たちは外国の旅をしている気がして、こんな経験のかつてない人たちであるから非常におもしろく思つた。中島の入り江になつた所へ船を差し寄せて

眺望ちようぼう

をするのであつたが、ちよつとした岩の形なども皆絵の

中の物のようであつた。あちらにもそちらにも霞かすみと同化したよう

な花の木の梢こずえが錦を引き渡して、御殿のほうははるばると見

渡され、そちらの岸には枝をたれて柳が立ち、ことに派手はでに咲い

た花の木が並んでいた。よそでは盛りの少し過ぎた桜もここばかりは真盛まさかりの美しさがあつた。廊を廻つた藤ふじも船が近づくにした

がつて鮮明な紫になつていく。池に影を映した山吹やまぶきもまた盛り

に咲き乱れているのである。水鳥の雌雄の組みが幾つも遊んでいて、あるものは細い枝などをくわえて低く飛び交つたりしていた。鴛鴦おしどりが波の綾あやの目に紋を描いている。写生しておきたい気のする風景ばかりが次々に目の前へ現われてくるのであったから、仙人にんの遊戯ごうごつを見ているうちに斧おのの木の柄が朽ちた話と同じような恍惚状態になって女房たちは長い時間水上にいた。

風吹けば浪なみの花さへ色見えてこや名に立てる山吹さきの崎

春の池や井手の河瀬かはせに通ふらん岸の山吹底も匂におへり

亀かめの上の山も訪ねたづじ船の中に老いせぬ名をばここに残さん

春の日のうららにさして行く船は竿さをの雫しづくも花と散りける

こんな歌などを各自が詠よんで、行く先をも帰る所をも忘れるほど若い人たちのおもしろがつて遊ぶのに適した水の上であつた。暮れかかるころに「皇こうじょう」という楽の吹奏が波を渡つてきて、人々の船は歡樂陶酔の中に岸へ着き、設けられた釣つり殿どのの休息所へはいつた。ここの室内の裝飾は簡単なふうにしてあつて、しかも艶えんなものであつた。各夫人の若いきれいな女房たちが、競つて華美な姿をして待ち受けていたのは、花の飾りにも劣らず美しかつた。曲のありふれたものでない樂が幾つか奏されて、舞い手にも特に選抜された公きん達だちが出され、若い女に十分の満足を与えた。夜になつてしまつたことを源氏は残念に思つて、前の庭かがりに篝かを

ぼさせ、階段の下の苔こけの上へ音楽者を近く招いて、堂上の親王がた、高官たちと堂下の伶人れいじんとで大合奏が行なわれるのであつた。専門家の中の優美な者だけが選ばれて、双調そうちょうを笛で吹き出したのをはじめに、その音を待ち取つた絃樂げんがくが上で起こつたのである。絃樂の人ははなやかな音をかき立てて、歌手は「安名尊あなとうと」を歌つた。生きがいのあることを感じながら庶民たちまでも六条院の門前の馬や車の立てられた蔭かげへはいつてこれらを聞いていた。春の空に春の調子の楽音の響く効果というものを、こうした大管絃樂を行なつて堂上の人々は知つたであらうと思われた。終夜音楽はあつた。呂ろの樂を律へ移すのに「喜春樂きしゅんらく」が奏されて、兵部卿ひょうぶきょうの宮は「青柳あおやぎ」を二度繰り返してお歌いになつた。そ

れには源氏も声を添えた。夜が明け放れた。この朝ぼらけの鳥のさえずりを、中宮は物を隔ててうらやましくお聞きになったのであった。常に春光の満ちた六条院ではあるが、外来者の若い興奮をそそる対象のないことをこれまで物足らず思った人もあったが、西の対の姫君なる人が出現して、これという欠点のない人であること、源氏が愛して大事にかしづくことが世間に知れた今日では、源氏の予期したとおりに思慕を寄せる者、求婚者になる者が多かつた。わが地位に自信のある人たちは、女房などの中へ手蔓てづるを求めて姫君へ手紙を送る方法もあるし、直接に意志を源氏へ表明することも可能であるが、そうした大胆なことではできずに、心だけを悩ましている若い公きん達だちなどもあることと思われる。その中に

はほんとうのことを知らずに、内大臣家の中將などもあるようである。兵部卿の宮も長く同棲どうせいしておいでになった夫人を亡なくしておしまいになって、もう三年余りも寂しい独身生活をしておいでになるのであつたから、最も熱心な求婚者であつた。今朝けさもずいぶん酔つたふうをお作りになって、藤ふじの花などを簪かざしにさして、風流な乱れ姿を見せておいでになるのである。源氏も計画どおりになつていくと、心では思うのであるが、つとめて素知らぬ顔をしていた。酒杯のまわつて来た時、迷惑な色をお見せになつて宮は、

「私がある望みを持っていないのでしたら、逃げ出してしまふ所ですよ。もういけません」

と言つて、手をお出しになろうとしない。

紫のゆゑに心をしめたれば淵ふちに身投げんことや惜しけき

とお言いになつてから、源氏に、

「あなたはお兄様なのですからお助けください」

と源氏にその杯をお譲りになるのであつた。源氏は満面に笑えみを見せながら言う。

淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見
ん

源氏がぜひと引きとめるので、宮もお帰りになることができなかった。

今朝けさの管絃楽はまたいつそうおもしろかった。この日は中宮が僧に行なわせられる読どき經ぎょうの初めの日であったから、夜を明かした人たちは、ある部屋へや部屋べやで休息を取つてから、正装に着かえてそちらへ出るのも多かつた。障さわりのある人はここから家へ歸つた。正午ごろに皆中宮の御殿へ参つた。殿上役人などは残らずそのほうへ行つた。源氏の盛んな権勢に助けられて、中宮は百官まつたの全まい尊敬を得ておいでになる形である。春の女王にょおうの好意で、仏前へ花が供せられるのであつたが、それはことに美しい子が選ばれた。

童女八人に、蝶ちようと鳥を形どつた服装をさせ、鳥は銀の花かびん瓶に桜の
さしたのを持たせ、蝶には金の花瓶に山吹をさしたのを持たせて
あつた。桜も山吹も並み並みでなくすぐれた花はな房ぶさのものがそろ
えられてあつた。南の御殿の山ぎわの所から、船が中宮の御殿の
前へ来るころに、微風が出て瓶の桜が少し水の上へ散つていた。
うららかに晴れたその霞の中から、この花の使者を乗せた船の出
て来た形は艶えんであつた。天幕をこちらの庭へ移すことはせず、
左へ出た廊を楽舎のようにして、腰掛けを並べて楽は吹奏されて
いたのである。童女たちは階きざし梯の下へ行つて花を差し上げた。
香炉を持って仏事の席を練つていた公きん達だちがそれを取り次いで仏
前へ供えた。紫の女王の手紙は子息の源中将が持つて来た。

花園の胡蝶こてふぶをさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん

というのである。中宮はあの紅葉もみじに対しての歌であると微笑して見ておいでになった。昨日きのう招かれて行った女房たちも春をおけなしになることはできませんまいと、すっかり春に降参して言っていた。うらかな鶯うぐいすの声と鳥の楽が混じり、池の水鳥も自由に場所を変えてさえずる時に、吹奏楽が終わりの急な破はになったのがおもしろかった。蝶ちようははかないふうに飛び交かつて、山吹が垣かきの下に咲きこぼれている中へ舞つて入る。中宮の亮すけをはじめとしてお手伝いの殿上役人が手に手に宮の纏てんとう頭を持って童女へ賜わった。

鳥には桜の色の細長、蝶へは山吹やまぶきがさねをお出しになつたのである。偶然ではあつたがかねて用意もされていたほど適当な賜物たまものであつた。伶人れいじんへの物は白のひとかさね襲、あるいは巻き絹などと差があつた。中将へは藤ふじの細長を添えた女の装束をお贈りになつた。中宮のお返事は、

昨日は泣き出したくなりますほどうらやましく思われました。

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

といふのであつた。すぐれた貴女きじよがたであるが歌はお上手じょうずでなかつたのか、ほかのことに比べて遜そんしよく色いろがあるところの御贈答

などでは思われる。昨日のことであるが、招かれて行った女房たちの、中宮のほうから来た人たちには意匠のおもしろい贈り物がされたのであった。そんなことをあまりこまごまと記述することは読者にうるさいことであるから省略する。毎日のようにこうした遊びをして暮らしている六条院の人たちであつたから、女房たちもまた幸福であつた。各夫人、姫君の間にも手紙の行きかいは多かつた。

たまかざら

玉鬢とうかの姫君はあの踏歌とうかの日以来、紫夫人の所へも手紙を書

いて送るようになった。人柄の深さ浅さはそれだけで判断されることでもないが、はなちるさと落ち着いたなつかしい気持ちの人であることだけは認められて、はなちるさと花散里からも、紫の女王からも玉鬢は好意を

持たれた。結婚を申し込む人は多かつた。いいかげんに自分だけでこのことはだれにと決めてしまうことのできないことであると源氏は思っているのであつた。自身でも親の心になりきつてしまふことが不可能な気がするのか、実父に玉鬘たまかざらの存在を報ぜようかという考えの起こることも間々あつた。源中将は親しい気持ちで玉鬘の居間の御簾みすに近く来て話すこともある。玉鬘もそれに対して、自身が直接話をしなければならぬことになつてゐるのを女は恥ずかしく思ったが、兄弟ということになつてゐるのであるからといつて、右近たちは睦むつまじくすることを勧めていた。中将はいつもまじめで、よけいな想像などはしないふうで、姉と信じていた。内大臣家の公きんだち達も中将に伴われてこちらの御殿へ、

下心をほのめかすふうに來たりもするのであるが、そうした問題ではなしに、なつかしい気持ちでほんとうの兄弟たちを玉鬘はながめていた。実父に逢あいたいと常に人知れず思うのであるが、その素振りは見せずに、信頼しきった様子だけが源氏に見えるのも、いつそう可憐かれんに、いつそう処女らしくこの人を思わせた。似ているというのではないがやはり母の夕顔のよさがそのままこの人にもあつて、その上に才女らしいところが添つていた。

衣がえをする初夏は、空の気持ちなども理由なしに感じのよい季節であるが、閑暇ひまの多い源氏はいろいろな遊び事に時を使つていた。玉鬘のほうへ男性から送つて來る手紙の多くなることに興味けそうぶみを持って、またしても西の対へ出かけてはそれらの懸想文を

源氏は読むのであつた。あるものは返事を書けと源氏が勧めたりするのを玉鬢は苦しく思つた。ひょうぶきよう兵部卿の宮がまだ何ほどの時間を経過しているのでもないのに、もうあせつて恨みらしいことをたくさんお書きになつた手紙を、ほかの手紙の中から見いだして心からおかしそうに源氏は笑つた。

「私は若い時からおおぜいの兄弟たちの中で、この宮とだけは最も親密な交際ができたのだが、恋愛問題については私に話されたことがなかつたし、私もその方面のことは別にしてあつたものだが、今になつて宮の恋のお悩みに触れるということ、私は満足もでき、また物哀れな気にもなる。ぜひこのかたなどにはお返事をお書きなさい。少し見識を備えた女が、交際を始める価値のあ

る男と言つてはこの宮以外にあるとも思えないかたなのですから
ね」

などと若い女の心を惹きひきそうなことを源氏は言うのであるが、
玉鬘はただ恥ずかしくばかり聞いていた。右大将が高官の典型の
ようなまじめな風采ふうさいをしながら、恋の山には孔子も倒れるとい
う諺ことわざをほんとうにして見せようとするふうな熱意のある手紙を書
いているのも源氏にはおもしろく思われた。そうした幾通かの中
に、薄青色の唐紙の薰物たきものの香を深く染しませたのを、細く小さく
結んだのがあつた。あけて見るときれいな字で、

思ふとも君は知らじな湧わき返り岩洩もる水に色し見えねば

と書いてある。書き方に近代的なかなさが見せてあるのである。

「これはどんな人のですか」

と源氏は聞くのであるが、はかばかしい返辞を玉鬘はしない。

源氏は右近を呼び出した。

「こんな手紙をよこす人たちに細心な注意を払ってね、分類をしてね、返事をすべき人には返事をさせなければいけない。近ごろの男が暴力で恋を遂げるというようなことも、必ずしも男の咎とがばかりではない。それは私自身も体験したことで、あまりに冷淡だ、無情だ、恨めしいと、そんな気持ちが積もり積もって、無法をし

てしまうのだ。またそれが身分の低い女であれば、失敬な態度だと思つては罪を犯すことにもなるのだ。たいしたことではなしに、花や蝶につけての返事はして、この程度の交際を持續させておくことも相手を熱心にさせる効果のあるものだからね。あるいはまたそれなりに双方で忘れてしまふことになつても少しもさしつかえのないことだ。けれどまた誠意のない出来心で手紙をよこしたような場合にすぐ返事を書いてやるのもよろしくない。あとで批難されても弁解のしようがない。全体女というものは、慎み深くしていずに、動いた感情をありのままに相手へ見せることをしては、結果は必ずよくないものだが、宮や大将が謙遜な態度をとつて、いいかげんな一時的な恋をされる訳はないのだからね。い

つも返事をせずに自尊心を持ち過ぎた女のように思わせるのも、この人にはふさわしくなくことだからね。またそれ以下の人たちのことは、忍耐力の強さ、月日の長さ短さによって、それ相応に好意的な返事をするのだね」

と源氏が言っている間、顔を横向けていた玉鬘たまかざらの側面が美しく見えた。派手はでな薄色の小桂こうちぎに撫なで子色しこの細長を着ている取り合わせも若々しい感じがした。身の取りなしなどに難はなかつたというものの、以前は田舎の生活から移ったばかりのおおようさが見えるだけのものであった。紫夫人などの感化を受けて、今では非常に柔らかな、繊細な美が一挙一動に現われ、化粧などもじょうず上手じょうずになって、不満足な氣のするようないことは一つもないはな

やかな美人になっていた。人の妻にさせては後悔が残るであろうと源氏は思った。右近も二人を微笑ほほえんでながめながら、父親として見るのに不似合いな源氏の若さは、夫婦であつたなら最もふさわしい配偶であらうと思つていた。

「ほかからのお手紙のお取り次ぎは決してだれもいたさないでございませう。前からも送つておいでになります方は、三度も四度も続けてお返しばかりしてはと思ひまして、ただ私たちだけお預かりしてあるのでございませうから、お返事は、殿様が書けとお言いになります分だけを、それも迷惑がつかつてお書きになるだけなのでございませう」

と右近が言う。

「それにしてもこの控え目な結んであつた手紙はだれのかね。苦心の跡の見えるものだ」

微笑を浮かべながら源氏はこの手紙に目を落としていた。

「それはぜひ置かせてくれとお言いになつたのでございまして、内大臣家の中將さんがこちらの海松子みるこを前に知つていらつしやいまして、海松子が持つて参つたのでございます。だれもまだ内容は拜見しておりませんでした」

「かわいい話ではないか。今は殿上役人級であつても、あの人たちに失敬なことをしていい訳はない。公卿こうけいといつてもこの人の勢いに必ずしも皆まで匹敵できるものでない。私の予言は必ず当たるよ。この人たちには露骨でなく、上手じょうずに切尖きつさきをはずさせ

るように工夫くふうするのだね。おもしろい手紙だよ」

と言つて、源氏はその手紙をすぐにも下へ置かずに見ていた。

「私がいろいろと考えたり、言つたりしていても、あなたにこうしたいと思つておいでになることがないのであるうかと、気づかわしい所もあります。内大臣に名のつて行くことも、まだ結婚前
のあなたが、長くいつしよにいられる夫人や子供たちの中へはい
つて行つて幸福であるかどうか疑問だと思つて私は躊躇ちゆうちよし

ているのです。女として普通に結婚をしてから出会う機会をとら
えたほうがいいと思うのですが、その結婚相手ですね、兵部卿の
宮は表面独身ではいられるが、女好きな方で、通つてお行きにな
る人の家も多いようだし、また邸やしきには召めしゆうど人という女房の中の

愛人が幾人もいるということですからね、そんな関係というものは、夫人になる人が嫉妬しつとを見せないで自然に矯きようせい正せいさせる努力さえすれば、世間へ醜態も見せずに穏やかに済みますが、そうした気持ちになれない性格の人は、そんなつまらぬことから夫婦仲がうまくゆかずに、良人おととの愛を失ってしまう結果にもなりますから、ある覚悟がいらしますよ。右大将は若い時からいっしょにいた夫人が年上であることなどから、その人と別れるためにも、新たな結婚をしたがっているのですが、しかし、それも面倒めんどうの添った縁だと人の言うそれですからね、だから私も相手をだれとも仮定して考えて見るのができないのです。こんなことは親にもはつきりと意見の述べられない問題なのだが、あなたもひどくまだ

若いというのではないから、自身の結婚する相手について判断の
できない訳はないと思う。私をあなたのお母様だと思つて、何で
も相談してくださいすつたらいいと思う。あなたに不満足な思いをさ
せるような結婚はさせたくないと私は思っているのです」

こう源氏はまじめに言つていたが、玉たまかずら鬢ははどう返事をして
よいかわからないふうを続けているのもさげすまれることになる
であろうと思つて言つた。

「まだ物心のつきませんころから、親というものを目に見ない世
界にいたのでございますから、親がどんなものであるか、親に対
する気持ちはどんなものであるか私にはわかつてないのでござい
ます」

このおおような言葉がよくこの人を現わしていると源氏は思った。そう思うのがもつともであるとも思った。

「では、親のない子は育ての親を信頼すべきだという世間の言いならわしのよう^に私の誠意をだんだんと認めていってくれますか」
などと源氏は言っていた。恋しい心の芽ばえていることなどは
気恥ずかしくて言い出せなかつた。それとなくその気持ちを言う
言葉は時々混ぜもするのであるが、気のつかぬふうであつたから、
歎息たんそくをしながら源氏は帰つて行こうとした。縁ひに近くはえた呉く
れた竹たけが若々しく伸びて、風に枝を動かす姿に心が惹かれて、源氏
はしばらく立ちどまつて、

「ませのうらに根深く植ゑし竹の子のおのがよよにや生おひ別る
べき」

その時の気持ちが想像されますよ。寂しいでしょうからね」
外から御簾みすを引き上げながらこう言った。玉鬘は膝いざ行つて出て
言つた。

「今さらにいかならんよか若竹の生ひ始めけん根をば尋ねん
かえつて幻滅を味わうことになるでしょうから」

源氏は哀れに聞いた。玉鬘の心の中ではそうも思っているので

はなかつた。どんな時に機会が到来して父を父と呼ぶ日が来るの
 であろうとたよりない悲しみをしているのであるが、源氏の好意
 に感激はして、実父といつても初めから育てられなかつた親
 は、これほどこまやかな愛を自分に見せてくれないのではあるま
 いかと、古い小説などからもいろいろと人生を教えられている玉た
 鬢まかざらは想像して、自身が源氏の感情を無視して勝手に父へ名の
 つて行くことなどはできないとしていた。

源氏は別れぎわに玉鬢の言つたことで、いつそうその人を可憐かれん
 に思つて、夫人に話すのであつた。

「不思議なほど調子のなつかしい人ですよ。母であつた人はあま
 りに反撥はんぱつ性を欠いた人だつたけれど、あの人は、物の理解力も

十分あるし、美しい才気も見えるし、安心されなような点が少しもない」

この源氏の賞め言葉ほを聞いていて夫人は、良人おつとが単に養女として愛する以外の愛をその人に持つことになっていく経路を、源氏の性格から推して察したのである。

「理解力のある方にもせよ、全然あなたを信用してたよつていてはどんなことにおなりになるかとお気の毒ですわ」

と女王によおうは言った。

「私は信頼されてよいだけの自信はあるのだが」

「いいえ、私にも経験があります。悩ましいような御様子をお見せになったことなど、そんなこと私はいくつも覚えていなのです

もの」

微笑をしながら言っている夫人の神経の鋭敏さに驚きながら、源氏は、

「あなたのことなどといっしよにするのはまちがいですよ。そのほかのことで私は十分あなたに信用されてよいこともあるはずだ」と言っただけで、やましい源氏はもうその話に触れようとしないのであったが、心の中では、妻の疑いどおりに自分はなつていくのでないかという不安を覚えていた。同時にまた若々しいけしからぬ心であると反省もしていたのである。

気にかかる玉鬢を源氏はよく見に行つた。しめやかな夕方に、前の庭の若わか楓かえでと柏かしわの木がはなやかに繁り合つていて、何とは

なしに爽そうかい快な気のされるのをながめながら、源氏は「和しまた清し」と詩の句を口ずさんでいたが、玉鬘の豊麗な容貌ようぼうが、それにも思い出されて、西の対へ行つた。手習いなどをしながら気楽な風でいた玉鬘が、起き上がった恥ずかしそうな顔の色が美しく思われた。その柔らかいふうにふと昔の夕顔が思い出されて、源氏は悲しくなつたまま言つた。

「あなたにはじめて逢あつた時には、こんなにまでお母様に似ているとは見えなかつたが、それからのちは時々あなたをお母様だと思ふことがあるのですよ。その点ではずいぶん私を悲しからせるあなただ。中将が少しも死んだ母に似た所がないものだから、親子というものはそれくらいのものかと思つていましたかね、あな

たのような人もまたあるのですね」

涙ぐんでいたのであった。そこに置かれてあつた箱の蓋ふたに、菓子と橘たちばなの実を混ぜて盛つてあつた中の、橘を源氏は手にもてあそびながら、

「橘のかをりし袖そでによそふれば変はれる身とも思ほえぬかな

長い年月の間、どんな時にも恋しく思い出すばかりで、慰めは少しも得られなかつた私が、故人にそのままあなたを家の中で見ることは、夢でないかとうれしいにつけても、また昔が思われます。あなたも私を愛してください」

と言つて、玉たま鬢かざらの手を取つた。女はこんなふうに扱われたことがなかつたから、心持ちが急に暗く憂鬱ゆううつになつたが、ただ腑ふに落ちぬふうを見せただけで、おおようにししながら、

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

と言つたが、不安な気がして下を向いている玉鬢たまかざらの様子が美しかった。手がよく肥えて肌目はだめの細かくて白いのをながめているうちに、見がたい物を見た満足よりも物思いが急にふえたような気が源氏にした。源氏はこの時になつてはじめて恋をささやいた。女は悲しく思つて、どうすればよいかと思つと、身体からだに慄ふるえの出

てくるのも源氏に感じられた。

「なぜそんなに私をお憎みになる。今まで私はこの感情を上手じょうずにおさえていて、だれからも怪しまれていなかったのですよ。あなたも人に悟らせないようにつとめてください。もともと愛している上に、そうなればまた愛が加わるのだから、それほど愛される恋人というものはないだろうと思われる。あなたに恋をしている人たちより以下のものに私を見るわけではないでしょう。こんな私のような大きい愛であなたを包もうとしている者はこの世にははずなのですから、私が他の求婚者たちの熱心の度にあきたらないもののあるのはもつともでしょう」

と源氏は言った。変態的な理屈である。雨はすっかりやんで、

竹が風に鳴っている上に月が出て、しめやかな気になった。女房たちは親しい話をする主人たちに遠慮をして遠くへ去っていた。始終逢^あっている間柄ではあるが、こんなよい機会もまたとないような気がしたし、抑制したことが口へ出てしまったあとの興奮も手伝って、都合よく着ならした上着は、こんな時にそつと脱ぎずべらすのに音を立てなかつたから、そのまま玉鬢の横へ寝た。玉鬢は情けない気がした。人がどう言うであろうと非常に悲しくなった。実父の所であれば、愛は薄くてもこんな禍^{わざわ}いはなかつたはずであると思うと涙がこぼれて、忍ぼうとしても忍びきれないのである。玉鬢がそんなにも心を苦しめているのを見て、

「そんなに私を恐れておいでになるのが恨めしい。それまでに親

しんでいなかっただ人たちでも、夫婦の道の第一歩は、人生の掟おきてに従つて、いつしよに踏み出すのではありませんか。もう馴染なじんでから長くなる私が、あなたと寝て、それが何恐ろしいことですか。これ以上のことを私は断じてしませんよ。ただこうして私の恋の苦しみを一時的に慰めてもらおうとするだけですよ」

と源氏は言ったが、なお続いて物哀れな調子で、恋しい心をいろいろに告げていた。こうして二人並んで身を横たえていることで、源氏の心は昔がよみがえったようにも思われるのである。自身のことではあるが、これは軽率なことであると考えられて、反省した源氏は、人も不審を起こすであらうと思つて、あまり夜も更ふかさないうで帰つて行くのであつた。

「こんなことで私をおきらいになつては私が悲しみますよ。よその人はこんな思いやりのありすぎるものではありませんよ。限りもない、底もない深い恋を持っている私は、あなたに迷惑をかけるような行為は決してしない。ただ帰つて来ない昔の恋人を悲しむ心を慰めるために、あなたを仮にその人としてもものを言うことがあるかもしれませんが、私に同情してあなたは仮に恋人の口ぶりでものを言つていくだすつたらいいのだ」

と出がけに源氏はしんみりと言うのであつたが、たまかざら玉鬘はぼ
うとなつていて悲しい思いをさせられた恨めしさから何とも言わ
ない。

「これほど寛大でないあなたとは思つていなかったのに、非常に

憎むのですね」

と歎息たんそくをした源氏は、

「だれにもいっさい言わないことにしてください」

と言つて歸つて行つた。玉鬘は年齢からいえば何ももうわかつていてよいのであるが、まだ男女の秘密というものはどの程度のものを言うのかを知らない。今夜源氏の行為以上のものがあると
も思わなかつたから、非常な不幸な身になつたようにも歎なげいて
るのである。気分も悪そうであつた。女房たちは、「病氣でも
おありになるようだ」と心配していた。

「殿様は御親切でございますね。ほんとうのお父様でも、こんな
にまでよくあそばすものではないでしょう」

などと、兵部がそつと来て言うのを聞いても、玉鬘は源氏がさげすまれるばかりであつた。それとともに自身の運命も歎かれた。翌朝早く源氏から手紙を送つて来た。身体がからだ苦しくて玉鬘は寝ていたのであるが、女房たちはすざり硯などを出して来て、返事を早くするようと言う。玉鬘はしぶしぶ手に取つて中を見た。白い紙で表面だけは美しい字でまじめな書き方にしてある手紙であつた。例もないように冷淡なあなたの恨めしかったことも私は忘れられない。人はどんな想像をしたでしょう。

うちとけてねも見ぬものを若草のことありがほに結ぼほら
ん

あなたは幼稚ですね。

恋文であつて、しかも親らしい言葉で書かれてある物であつた。玉鬘は憎悪ぞうおも感じながら、返事をしないことも人に怪しませることであるからと思つて、分の厚い檀紙だんしに、ただ短く、

拝見いたしました。病氣をしているものでございますから、失礼いたします。

と書いた。源氏はそれを見て、さすがにはつきりとした女であると微笑されて、恨むのにも手ごたえのある気がした。

一度口へ出したあとは「おほたの松の」（恋ひわびぬおほたの松のおほかたは色に出いでてや逢はんと言はまし）というように、

源氏が言いからんでくることが多くなつて、玉鬘の加減の悪かつた身体がなお悪くなつていくようであつた。こうしたほんとうのことを知る人はなくて、家の中の者も、外の者も、親と娘としてばかり見ている二人の中にそうした問題の起こっていると、少しでも世間が知つたなら、どれほど人笑われな自分の名が立つことであろう、自分は飽くまでも薄倅はっこうな女である、父君に自分のことが知られる初めにそれを聞く父君は、もともと愛情の薄い上に、けいちよう軽な娘であるとうとましく自分が思われねばならないことである、玉鬘たまかづらは限りもない煩悶はんもんをしていた。兵部卿ひょうぶきょうの宮や右大将は自身らに姫君を与えてもよいという源氏の意向らしいことを聞いて、ほんとうのことはまだ知らずに、非常にうれ

しくて、いよいよ熱心な求婚者に宮もおなりになり、大将もなつた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

胡蝶

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>